

地獄の感覚

高橋洋

takahashi hirosi

どんなときに地獄を感じ取るかと言えば、言うまでもない、地中奥深くに潜む地獄そのものと繋がったと感じたときである。地獄はどこか現世とは次元の異なる空間に抽象的に想起されるものではなく、自分の足元、地下数十キロだか数百キロを果てしなくボーリングしていけばポコッと空洞に行き当たるかのように地続きに実在する、そういう感覚がずっと昔からある。

だから私は現世でいかに過酷な目に遭ったとしても、その営みが地獄と繋がったと感得できない限り、生き地獄だの地獄からの生還だのと比喩や隠喩を弄ぶつもりはない。地獄はそれ自体の比較を絶した苛烈さによって比喩や隠喩を許さないのである。

地獄の感覚とは即ち繋がりの感覚であることを文字とおり描いたのは、神代辰巳監督の『地獄』に登場する笠卒塔婆の、そこに嵌



め込まれた鉄輪を回してひとりで逆回りを始めたものは地獄に墜ちているという趣向であった。眼に見えぬ鉄条が鉄輪から無窮の闇の奥まで降りていって地上の問いにカラカラと呼応しているかのような、どこまでも物質的な連結の手触りこそが地獄の感覚なのであ

る。この趣向は、脚本の田中陽造が太宰治の『思ひ出』に記された子守女から聞かされた言い伝えに着想を得たと後に知ったが、津軽の伝承が鉄輪を回した者の運命を判定するのに対して、ただ卒塔婆の主の行き先を告げるのみとした田中の創意はより垂直的な繋が

の印象をもたらしたと言える（むろん、津軽の伝承も実は運命を告げるのではなく、すでもう一人の自分は地獄にいるとも解釈できるから怖い）。

繋がり感覚とは、比喩や隠喩を越えて、地上に地獄が現出したとも思える事態の感触である。寺院の暗がりでも子守女に連れられ地獄絵を垣間見た太宰少年の視線がいわば地下を希求し覗き見る監視カメラの視点であったとすれば、私や同世代の子供たちは、水木しげるの『悪魔くん』に描かれた魔法陣に魅了されて、地獄が地上に這い出ようとする上昇軸の脅威を待ち望むカメラ・アイの視点を獲得したのかもしれない。そんな私たちの視線は、例えばバリの街角を撮り続けたウジェーヌ・アジェの写真がなぜか犯罪現場に見えるという（最初にそう言ったのはベンヤミンらしいが）不思議をとらえて、そこに地獄を見出すのである。同様に牛腸茂雄の一群の肖像写真に鬼気迫る気配を焼きつけたのは、被写体たちが身構えるしかなかったという牛腸茂雄の視線に乗り移った地獄からの眼差しである。

大和屋笠はこれを「恐怖写真」と呼び、動く恐怖写真としての映画を夢想したが（この考え方は映画を心霊動画と断じる稲生平太郎の主張に極めて近い）、私が見るところ、映画が地獄の相貌を帯びるのは、一見すると地

獄の印象とは縁遠い小津安二郎の映画だった。原節子が父の説得を受け入れ結婚を決意する『晩春』の名高いシーンは、原節子の相貌にもう一つの相、父の言葉がもたらしたのとは納得ではなく絶望であり、父への思いを無理やり切断しようとするまさにその瞬間が映し出されているがゆえに、地獄の巫女が二重写しで現われ出た瞬間に思えるのである。恐ろしい場面が映し出されているからではなく、おそらくは小津の映画はしばしば表層の物語の下にもう一つの層を仕掛けようとしているために、見る者は背後世界との繋がりを感じ、自らの視線が地獄からの視線と同期するのを直覚する。これは地獄表現でしばしば引き合いに出されるバルベール・ドールヴィイの警句「地獄は小窓から覗き見た方が全体を一望するよりも恐ろしい」の最も高度な応用例と言えるかもしれない（ちなみにこの警句を文字どおりにやってみせたのがパゾリーニ『ソドムの市』のクライマックスである）。

しかし、ここまではある程度、地獄現出の働きを説明できたとしても、『秋刀魚の味』の加東大介が軍艦マーチに合わせて踊るシーンに私が地獄を感じることをどう説明すればいいのだろうか。あるいは小津の、現実から切り離された人工美の極致はついに異界に通じる穴をこじ開けてしまったとも思えてくる。バーのカウンターから降り立って足踏みを始め

めた加東大介の姿に思わず「地獄」と呟いた私は、視線が地獄と同期したのではなく、もはや地獄から見つめ返されていたのだろうか。

実は知り合いに悪魔から見つめ返されたという女性がいる。その悪魔は露地の塀にチョコンと腰かけ、西洋絵画そのままに抜け出たようにソックリで、しかしヌラヌラと紛れもなく生物のデイトイルを帯びていた。悪魔は眼が合うなり「俺が見えるんだ？ おめえ相当ヤキが回ってるな」と言ったという（実際相当ヤキが回っていた）。私も金縛りの半覚醒で似たようなものが本棚の上に座っているのを見たことがある。ああ、悪魔を描いた者はこれを見ていたのかと妙に得心し、しかし眼が合うことだけは避けた。今回は神代版しか触れる機会がなかったが、中川信夫、石井輝夫も含めた『地獄』諸篇での八大地獄の描写、映画において最も表現が困難な、皮膜一枚の繋がりと呼び寄せるそもそもの求心力の形象化について、この体験は少し手がかりを与えてくれたように思うのである。むろん、地獄そのものは表象不能である。八大地獄とは（アレゴリカルな？）「そうではない形」に過ぎない。しかし、なぜそのような形が見出されたのか。手がかりと呼ぶのはそこである。

（たかはし ひろし・脚本家・映画監督）
監督作品に『霊的ポリシエヴィキ』など